

No.45

# セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

発行 2009.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 稲富初夫

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸内乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

[http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko\\_bunka/k\\_shisetsu/kyuto/](http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/)

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



## そめつけゆうりこうじゅもくかささぎもんさら 染付釉裏紅樹木鵠文皿

館蔵資料 (19-7414)

中国・景德鎮窯 17世紀前半

口 径： 21.2cm

高 さ： 3.8cm

高台径： 8.4cm

染付で樹木やその枝にとまるカササギを描き、釉裏紅による赤色で枝の一部などが表現されています。明時代末に中国・景德鎮窯で作られた皿です。古来、中国ではカササギは吉報をもたらしてくれる縁起の良い鳥とされ、「靈鵞報喜図」として絵画などにもしばしば登場します。この皿では文様が簡略化されて分かりづらいですが、本来は梅の木とカササギの組み合わせです。17世紀の肥前磁器でも染付と釉裏紅を併用することが行われ、その際に同作品のような製品が参考にされたものと推定されています。

常設特別展のお知らせ  
開館30周年イベント  
**「私が選んだ九陶のやきもの」展**

## ○趣旨

佐賀県立九州陶磁文化館は、来年の平成22年11月で開館30周年を迎えます。昭和55年の開館以来、肥前陶磁をはじめ各地で独自の発展をしてきた九州各县のやきものをはじめ、関連する日本や世界の陶磁器の調査研究と収集を継続し、柴田夫妻コレクションを始め、有数の陶磁器コレクションを形成することができました。そして、これまでそれらを紹介する様々な展覧会を、館主体の企画として開催してきました。

今回の展覧会は、開館三十周年の記念イベントとして約30年間に収集した作品の中から代表的なものを選び一堂にご紹介するのですが、特に、その作品選定には、当館ばかりではなく、当館に関心を持っていただけた皆様にも一役かっていただき展

示作品を決定しようとするもので、館を代表する名品ばかりでなく、日頃あまり知らない収蔵品も出品されます。

館の内外から選ばれた作品によって構成された展覧会により、開館30年目を迎える九陶の姿を御紹介いたします。

○主催及び会場	佐賀県立九州陶磁文化館 第1・第2・第3展示室
○会期	平成21年9月18日(金)～10月25日(日) 35日間(月曜休館)
○出品点数	250件(予定)
○観覧料	無料
○展示解説	9月26日(土) 14:00～15:00 10月10日(土) 14:00～15:00



鉄絵萩文壺（絵唐津） 肥前・唐津 1590～1610年代



染付鶴文三足付大皿 肥前・鍋島藩窯 重要文化財  
1690～1710年代



色絵赤玉雲龍文鉢 肥前・有田窯 1700～20年代



染付山水文輪花大皿 肥前・有田窯 重要文化財  
1640～50年代 今泉吉郎氏贈

## 寄贈記念「青木龍山回顧展」

- 会期 平成21年6月19日(金)～7月20日(月)
- 内容 日本芸術院会員で文化勲章受章者であった故青木龍山氏の創造の軌跡を寄贈作品を中心に展示します。
- 展示数 90件 100点(予定)
- 会場 第2展示室



天目「悠」 青木龍山 青木清高氏贈  
平成3年(1991) 第23回日展出品

## 新収蔵品展Ⅰ

- 会期 平成21年7月18日(土)～8月23日(日)
- 内容 平成20年度に新たに館蔵となった陶磁器を展示します。
- 展示数 50件 100点(予定)
- 会場 第2展示室

## 新収蔵品展Ⅱ 「肥碟山信甫と明治の有田」

- 会期 平成21年7月18日(土)～8月23日(日)
- 内容 平成20年度に有田の田代家から寄贈された陶磁器を展示します。
- 展示数 150件 200点(予定)
- 会場 第2展示室

## テーマ展 新春展「干支 寅の文様」

- 会期 平成21年12月11日(金)  
～平成22年1月11日(月)
- 内容 平成22年の干支である虎の意匠をもつ陶磁器を選び展示します。
- 展示数 50件 60点(予定)
- 会場 第1展示室



染付竹虎文輪花皿  
肥前・有田窯  
1650～60年代

## テーマ展 夏休み特別企画 「てのひらのやきものーかわいい小皿・豆皿ー」

- 会期 平成21年7月18日(土)～8月23日(日)
- 内容 かわいらしい小さなお皿を江戸時代の肥前陶磁を中心に展示します。
- 展示数 50件 100点(予定)
- 会場 第1展示室



染付三階松文松形手塙皿  
肥前・有田窯 1670～90年代  
柴田夫妻コレクション(2-409)



色絵龍貼付人物鳥文筒形大瓶  
肥前・有田・深川製  
明治初期

## テーマ展 「やきものの近代化 －西欧技術の導入と有田磁器の展開－」展

- 会期 平成22年2月2日(火)～2月21日(日)
- 内容 有田磁器を中心とした佐賀県の窯業の近代化について紹介・展示します。
- 展示数 60件 70点(予定)
- 会場 第1展示室



釉下彩下絵見本皿  
肥前・有田・青木商店  
明治30年(1898)

## ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて5 英国の肥前磁器コレクション その4 Hizen Porcelain Collections in the UK ジェニンズ(Jenyns)コレクション

大英博物館(The British Museum)の東洋美術部門の学芸員、ロンドンの東洋陶磁学会(The Oriental Ceramic Society, 略してOCS) の会員として、輸出肥前磁器研究に画期的な成果を挙げたソーム・ロジャー・ジェニンズ(Soame Roger Jenyns) (1904-76) は、英國ケンブリッジ(Cambridge)近郊のボティシャム(Bottisham) 村のボティシャム・ホール(Bottisham Hall)の跡取りとして生まれた。17世紀初めから続くジェニンズ家は同じ名前の政治家や詩人を輩出した名家で、現在の建物は18世紀に建て直されたもので、曾てはそこに16世紀からの屋敷があったといい、その絵が今も残されている。

ソームの美術への関心はその家にある一連の水彩画によって培われ、生涯続く東洋美術への関心は、ケンブリッジ大学卒業後、若き士官候補生として広東、香港に4年駐屯し、中国語を習い、骨董店にも通ったことに根ざすといわれる。

1931年にロンドンに戻ると大英博物館の東洋部門に迎えられ、第二次世界大戦中の1940-45年に海軍省と外務省に勤務したほかは、1968年の退職まで大英博物館で研究に邁進し、その研究資料としてのコ

TANAKA, Shigeko

田 中 恵 子

- 日本アジア協会理事
- 東洋陶磁学会（日本）会員
- The Oriental Ceramic Society(London)会員

レクションは増えていった。第二次大戦後も消えない日本への敵意は日本陶磁の値段を押し下げ、店に品物は溢れて目利きには絶好の買い場であった。死に際してコレクションをオックスフォード大学のアッシュモーリアン美術館(Ashmorean Museum, Oxford)に寄贈したライトリンガー(Gerald Reitlinger) (1900-78) も、ソームと意見交換しながら蒐集した仲間である。

1956年春にロンドンで日本陶磁展が開かれたが、ソームはその図録の責任者として、295点の展示物のうちの70点を自分のコレクションから出品、それまで西欧の研究者が全く関心を示さず、日本人も殆どその存在を知らずにいた、17世紀の有田と当時日本で九谷とされていた磁器が英國に輸出されていたことに、はじめて人々の関心を集めめた。その翌年ソームは初めて日本を訪れ、6ヶ月滞在したが、展覧会の評判が前もって伝わっていたので、日本各地で暖かく迎えられた。帰国後ソームの肥前磁器研究の成果は1965年にFaber and FaberからJapanese Porcelainとして出版され、モノクロではあったが巻末の写真は良き参考資料となった。



図1 色絵牡丹唐草文皿  
有田 1650~60年代  
口径31.0cm、高さ6.5cm、底径17.0cm



図2 色絵牡丹唐草文瓶  
有田 1650~60年代  
高さ25.0cm、底径9.0cm

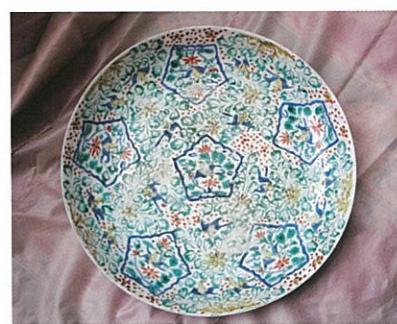


図3 色絵草花鳥文皿  
有田 1660~70年代  
口径26.0cm、高さ4.0cm、底径15.0cm

九州陶磁文化館特別学芸顧問の大橋康二氏によれば、図1の皿は從来の古九谷様式のうちの青手後期と分類しているものと、初期輸出色絵を結ぶ重要な資料で、緑・黄の色絵具でほとんど塗り埋め、黒線で文様を描き、裏文様の密な唐草文様を黒線で緑の下に表すところは青手後期に共通するが、赤を使っているところが青手様式と大きく違う。また、裏銘の「寿福」の組み合わせの崩れた銘は輸出向けにも使われていることから、青手が作られた時代に輸出向けに作られた皿である可能性が推測できるとのことである。

次にソームは漆工についての研究書を書くため、今度は夫人を伴って日本を訪れたが、その出版にまでは至らなかった。多くの来訪者を大英博物館の研究室に迎え、いくつもの国際学会に出席した。1974年に彼の東洋美術への入口であった香港を最後に訪問し、1976年に72才で死去した。

1979年に*Japanese Porcelain*は再版され、肥前磁器に関心を持つ人々に広く読まれ、ソームの東洋陶磁コレクションのうち、主として柿右衛門様式の皿、鉢、染付の大皿などの肥前磁器と中国陶磁の一部、総計170点が家族からケンブリッジ大付属のフィツウィリアム(Fitzwilliam) 美術館に寄託され、公開されている。

筆者は2007年夏に幾度か、ソームの生家、ボティシャム・ホールを訪れ、ソームの長男であるロジャーの案内で、邸内に残るソームのコレクションを見る機会を得た。柿右衛門は全て長男のロジャーが相続し、次男が相続したその他の器はヨークの屋敷に運ばれ、まもなくその一部がオークションにかけられたが、まだ、興味深い品が残されているとのことである。

この訪問でロジャーのもとから柿右衛門は全てフィ

ツツウィリアム美術館に寄託されたわけではなく、大皿、小皿、八角小器、輪花小鉢など、まだ数十点が数カ所の飾り棚の中に残されており、寄託の器の選別は美術館側の当時の学芸員によってなされたことがわかった。

この家には他の貴族の館や郷紳の家でよく見かける、18世紀前半の染付の上に赤金のみの色絵の装飾の器がなく、柿右衛門以前の染付と色絵が残されているが、収蔵品目録もなく伝来経緯は明らかでない。ロジャーによればソームは普通ロンドンで買っていたが、その記録もないとのことで、ソームの残したコレクションのうち、どれがこの屋敷にもとからあつたものかがわからないのが残念であるが、その一部を写真で紹介する。

#### 〈参考文献〉

- An Obituary for Roger Soame Jenyns by Gerald Reitlinger, TOCS 41, 1975-1977, p.XXV
- Soame Jenyns(1904-1976) recalled by John Figgess, TOCS 60, 1995-1996, p.157-161
- Soame Jenyns : Japanese Porcelain, Faber & Faber, 1965



図4 染付草花文瓶  
有田 1660年代頃  
残存高34.0cm、底径12.5cm



図5 色絵岩菊文角瓶  
有田 1660~70年代  
高さ24.0cm、底径10.0cm

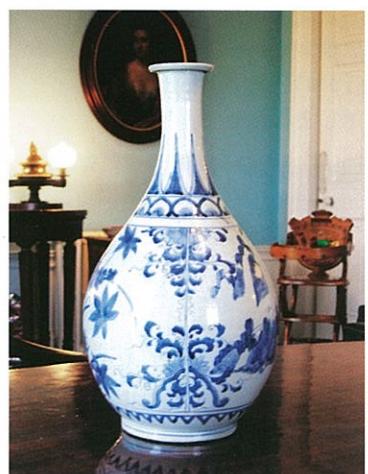


図6 染付岩草花文瓶  
有田 1655~60年代  
高さ44.0cm

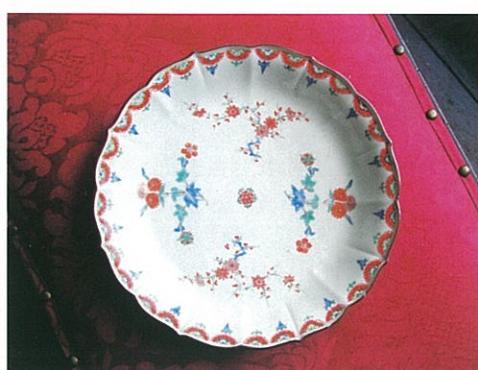


図7 色絵菊梅文輪花皿  
有田 1670~90年代  
口径35.0cm、底径18.5cm



図8 色絵鯉童子置物  
有田 18世紀前半



図9 色絵布袋置物  
有田 18世紀前半

## 平成20年度特別企画展の報告

## 「土の美 古唐津－肥前陶器のすべて－」

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館  
 ○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館  
     第1・第2・第3展示室  
 ○会 期 平成20年9月27日(土)～11月9日(日)  
     44日間  
 ○出品点数 243件294点及び古窯跡出土陶片257点  
 ○展示内容

唐津は、かつて瀬戸物と並び焼き物の代名詞でした。16世紀末に現在の唐津市北波多で焼かれはじめ、その後、生産地は肥前一帯に広がり、その作風も各地で独自性を帯びていきました。茶の湯に用いる道具類を多く焼いたことで知られるが、それのみならずさまざまな生活用具も多く作られました。

- |               |      |
|---------------|------|
| 1. 唐津焼の誕生     | 15件  |
| 2. 唐津焼の飛躍と普及  | 95件  |
| 3. 唐津焼のその後の展開 | 99件  |
| 4. 多様な唐津焼     | 34件  |
| 5. 窯跡出土陶片     | 257件 |

展覧会では、国の重要文化財「鉄絵松樹文大皿（絵唐津）」や「灰釉茶碗（奥高麗）銘三宝」をはじめ、江戸時代の茶道具や壺、皿など、名品のかずかずを展示了しました。



展示解説の様子

- 関連行事  
 講演会 11月1日(土) 13:30～15:00  
     「美濃焼から見た唐津焼」  
     講師：林 順一氏（土岐市文化振興課）  
 記念茶会 10月11日(土) 13:00～15:30  
 展示解説 10月11日(土)、10月25日(土)



開会式のテープカット



記念茶会の様子

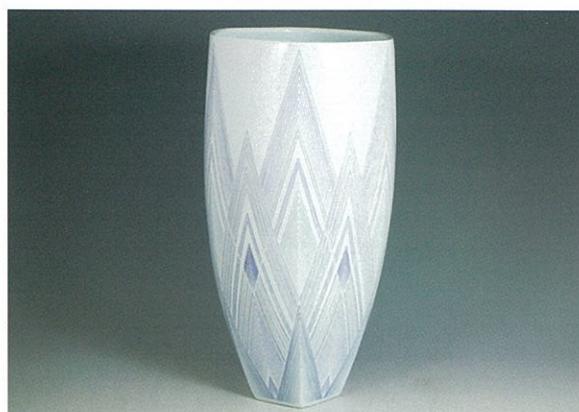
## 第105回九州山口陶磁展

- 会 期 平成20年4月29日(火)～5月10日(土)

12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として今回第103回目を迎えました。

今回の展覧会では、第1位の中尾恭純氏の「四方櫻文彩色象嵌面取花生」を始め、98点の入賞・入選作品が展示されました



第1位 文部科学大臣賞 中尾恭純  
 四方櫻文彩色象嵌面取花生

## 新収蔵品展

○会期 平成20年7月1日(火)～7月21日(月)  
19日間

平成19年度に購入及び寄贈をうけて新たに館蔵品となつた陶磁器を紹介しました。

古唐津の藁灰釉壺、鉄絵千鳥文向付や古伊万里の白磁唐花文角皿（1653年、承応式歲銘）、色絵竹梅鳳凰文角皿など、また、前年度九州山口陶磁展第1位の立井清人（1947～）「埋め込み大鉢」や、岩永範彦（1960～2002）「洋」などの現代作家の作品など合計53件70点を展示しました。



展示状況

## テーマ展 夏休み特別企画 やきもののかたち－人と動物－

○会期 平成20年7月23日(水)～8月31日(日)  
35日間

やきもののかたちは、江戸時代には主に食器などの器が多く作られましたが、人形類も優れたものが焼かれました。特に柿右衛門様式の婦人像や仔犬像などは高い評価を受けています。

展覧会では、様々なやきものの人形類29件86点を展示し、その製作技法や意匠を紹介しました。今回は特に九州国立博物館の協力による人形の内部構造を最新の文化財用X線CTスキャンで撮影した写真パネルなども展示しました。



展示状況

## テーマ展 茶の湯名碗30選展

○会期 平成20年11月14日(金)～11月30日(日)  
18日間

桃山・江戸期の茶の湯の隆盛は、九州陶磁の発展を大いに促し、唐津焼や上野焼、高取焼など九州各地の「国焼き」を形成しました。展覧会では、茶陶の主役ともいべき茶碗に着目し、九州陶磁を中心に、その先駆をなした中国・朝鮮陶磁など30件30点を展示しました。



展示状況

## 新春展 宴のうつわ展

○会期 平成20年12月19日(金)～  
平成21年1月12日(月) 20日間

江戸時代に和食の基本形が成立し、そのような料理をいただくための陶磁器のうつわの生産が盛んになりました。日常の食器はもとより、祝い事などの際に用いる華やかなうつわも多く作されました。展覧会では、肥前磁器を中心に、新春の祝いの宴にふさわしいうつわのかずかず50件80点を展示しました。



展示状況

## シリーズ

## やきものの技法(40)

## チャツ

チャツとは焼成の際に窯詰めに用いる小皿状の窯道具で、耐火粘土製と磁器製のものがあります。

工程からいふと、器物全体に釉掛けし、高台のすぐ内側の釉を蛇の目状に剥ぎ取り、その部分にこのチャツの口部が当たるようにして窯詰めします。高台疊付は浮いた状態で窯詰めされるため、焼き上がった製品の疊付はしっかりと施釉されているというわけです。疊付が施釉されている、つまりガラス質の釉で覆われていると、使うときに木の膳や卓を傷つけることがないという利点があります。

チャツを用いる窯詰め法は、中国の明時代の龍泉窯で青磁を焼造する際に用いられたもので、この技術が有田にもたらされ、1650年代に青磁を生産の中で用いられました。チャツという呼称も、中国で皿のことを「碟子」(チャツ)ということからきていると考えられています。また当初は青磁に限られていきましたが、1670~80年代以降は白磁や染付製品でもいくらかみられるようになります。しかし18世紀初め頃を最後に、チャツを用いる青磁の生産は行われなくなります。

高台内蛇の目釉剥ぎの窯詰め法が消えるなか、チャツを使った窯詰め法として、18世紀中頃から一般的になるのが、蛇の目凹形高台です。高台内を蛇の目釉剥ぎにするのは同様ですが、高台内中央を丸くぼませるのが特徴で、その形から蛇の目凹形高台と呼ばれています。基本的には染付製品で、18世紀後半から19世紀にかけて、小皿、小鉢、猪口などに多く用いられました。高台疊付に釉が掛かるため、台などを傷つけないことや、ハリ支えのかわりに底垂れを防いで焼き上げができるなどの利点がありました。

(宇治 章)



青磁牡丹獅子文皿（裏面） 肥前・有田 1650~60年代  
柴田夫妻コレクション1-157

## シリーズ

## やきものにみる文様(40)

## ねこ 猫 もん 文

猫は愛玩動物として平安時代に飼われていたことが『枕草紙』にもあらわされています。姿が美しく魅力的な動物ですが、靈的な力があると信じられ、日本ではさまざまな怪談にも登場します。このような傾向からか猫は日本の文様として決して多いものではありません。しかし文様の宝庫、古伊万里には猫の文様のものもみられます。

猫と蝶、そして牡丹の組み合わせは、長寿と富貴をあらわす文様です。この文様構成とその意味は中国から伝来しました。猫は同じ音の「耄 (おいぼれ)」(中国語ではマオと発音)を象徴し、蝶は「耋 (としより)」(中国語ではティエと発音)を象徴することから、猫と蝶の組み合わせは「耄耋 (ぼうてつ)」という言葉につなげます。「耄」は70歳のこと、「耋」は80歳のことともいわれています。「耄耋」という難しい言葉は現代日本人にとってピンときませんが、『解体新書』をあらわした蘭学者杉田玄白は84歳の時、老境の肉体的苦労を語った『耄耋独語』という隨筆を著しています。

下にあげた〈染付猫牡丹文輪花大皿〉は、中央に丸くなかった猫を染付で描き、陽刻の文様で周囲に牡丹と蝶をあらわしています。この皿をみて、「長寿と富貴」の意味を汲み取ることができる人はなかなかの文様通といえるでしょう。文様通のこのお皿の所有者は、猫と牡丹と蝶が豊かな老後を象徴するものであることを話のたねにしながら、食事を楽しんだことと思われます。

(藤原友子)

参考文献 王敏・梅本重一編『中国シンボル・イメージ図典』  
2003年 東京堂出版



染付猫牡丹文輪花大皿 肥前・有田 1740~70年代  
柴田夫妻コレクション6-268